

JTB グループ労働組合連合会 第3回震災復興ボランティア 活動報告レポート

今回の JTB グループ労働組合連合会震災復興ボランティアは、津波により甚大な被害を受けた岩手県陸前高田市に向かいました。

11月12日

午前 7:30 に北上駅前のホテルを出発したバスは、約1時間半かけて陸前高田市のボランティアセンターに向かいました。その日は全国各地から多くのボランティア団体が集まっていたようで、ボランティアセンターから少し離れた場所にある「川の駅よこた」で受付順番待ちのために待機する事になりました。

待機中、現地で車両の誘導をされていた方にお伺いした話によると、最近ではボランティアの参加者も徐々に少なくなっており、平日では1日にボランティアセンターを訪れる団体がバス 2 台分のみということもあるそうです。

被災地ではまだまだ多くの手助けを必要としているにも関わらず、震災から8ヶ月が過ぎてテレビ等による被災地の報道も少なくなる中、すでに復興しつつあるとの誤解が広がってしまっているのかも知れないと感じました。

到着から1時間ほどたって、いよいよわたし達の順番がやってきました。ボランティアセンターで派遣先と作業内容の指示を受けた後、スコップなどの道具をバスに積み込んで現地に移動するのですが、それに先立って係りの方からオリエンテーリングを受けました。

その方は県外からのボランティアとして活動されているそうで、ボランティアが果たす役割というのは、単に作業をするだけではなく、笑顔で地元の方々に元気を出して貰う事も重要な役割であると教えて頂きました。そして、ボランティアに来て実際に現地を見た人達には、今もまだ被災地の方々は苦しんでおり、一人でも多くの方の支援を必要としているという事を、地元に戻ってから周りの方に伝えて欲しいと仰っていました。

その日の作業内容は小友町の小友小学校周辺にある田んぼの瓦礫撤去作業に決まりました。

ボランティアセンターから作業現場に向かう道中、バスの車窓に広がる光景は衝撃的なものでした。平坦な土地に骨組みだけの建物がまばらに点在し、溶けたあめ細工のように上げた自動車が積み上げられている姿を目の当たりにした時、そこが紛れもなく被災地であり、想像を絶する災厄に見舞われたのだと言う事を改めて思い知らされました。

バスの停留所兼休憩所に指定されていた小友中学校に到着すると、そこには津波によって外壁を失った体育館の姿がありました。すでに瓦礫や土砂は取り除かれていたものの、吹きさらしの状態でバスケットのゴールが風に揺られており、時計も 2 時 50 分を指したまま止まっていました。

小友中学校でバスを降りてから、道具を携えて作業現場に指定された小友小学校周辺の田んぼに向かったところ、津波と共に流されてきた土砂に埋まり、作物を育てていたとは思えない荒地になっていました。そこを田畑として再生させるために、細かな瓦礫を一つずつ人手で取り除いていくのが、今回の作業内容です。

作業はスコップで土砂を掘り起こし、埋まっている瓦礫を取り除いて一輪車で道端に運ぶという単純なもので、4班に分かれて班毎にエリアを決めて実施しました。

一口に瓦礫といっても、石ころや木片ばかりではなく、子供のおもちゃや家電製品、洗剤などの生活用品等、ごく普通の生活空間の中にあっただけものが押し流されて、土砂の中に埋まっていました。それら被災の瞬間まで日常の一部であ

ったものを土砂から掘り出して積み上げ、作業を切り上げるころには道端に大きな瓦礫の山が出来上がっていました。それでも今回の作業では表層数センチに埋まっている瓦礫の一部を取り除いただけであり、その土地を田畑として再生させるためには、これから一体どれほどの労力が必要になるのか、想像する事すらできませんでした。

11月13日

作業二日目となるこの日も7:30にホテルを出発し、陸前高田市のボランティアセンターに向かいました。この日はボランティアの数が比較的少なかったのか、ほとんど待機時間なくスムーズに受付を済ませる事ができました。作業現場は前日とは異なり、より沿岸部に近い地域での瓦礫撤去作業となりました。

現場は前日以上に足場が悪く、小雨もばらつく中での作業となりましたが、もともと住宅街であつたらしく、生活の名残を感じさせるものが多く見つかりました。中には身分証名称や写真など、被災された方の思い出が詰まっているであろうものもあり、それら名前や顔が判別可能なものについてはすべてボランティアセンターに持ち帰り、保管して頂きました。持ち主の下に届けられる日がくる事を願ってやみません。

また、この日はJTBグループ労働組合連合会本部で長年にわたり書記を務めていただいた紺野さんが私たちのために炊き出しを行ってくださいました。雨にあたり身体が冷え切った中、暖かい食事を振舞っていたとき、身も心もとても温かくなりました。

最後に

今回、2回目の参加となりましたが、被災地ではまだまだ人手が足りていないのだと言う事を痛感しました。復興まではまだまだ長い時間と継続的な支援が必要となるにも関わらず、震災から時が経つにつれ身の回りでは被災地の情報が少なくなり、だんだん世の中の関心が薄れつつあると感じます。

だからこそ、ボランティアセンターの方が仰っていた通り、一人でも多くの人に自分が見てきたものを伝え、被災地支援を呼びかけて行きたいと思っています。